古文の窓❷

古典文学と月

教材のねらい

月の満ち欠けを基準とする旧暦や、月に関わる伝説や風習、信仰について理解を深め、物語や和歌、発句を鑑賞する力を養う。

特に『竹取物語』「かぐや姫の嘆き」にある「八月十五日」が旧暦では夏ではなく秋の一日であり、その夜の月はほぼ満月であることに気づかせたい。また、江戸時代の月見や月待の行事について学ぶことを通じて、月が信仰の対象となっていたことを理解させたい。

単元の言語活動３では、月の呼び名を調べ、月が詠まれた和歌を鑑賞する課題に取り組む。この活動をしやすくすることも、この教材のねらいの一つである。

解説

現代でも、満月の美しさがニュースになることはしばしばある。しかし、日常生活のなかで月の光の明るさを実感する機会はどれほどあるだろうか。新暦に親しんでいる私たちは、空に浮かぶ月を見て、ただちに月齢を言い当てられるだろうか。

この教材では、①旧暦、②秋の月を詠んだ和歌、③八月十五日の月見、④蕪村の句、⑤月待の行事、という五つの話題を取り上げている。以下、順に解説したい。

①旧暦

現代の私たちが使っている暦は、太陽の動きを基準とする新暦である。これが普及する明治期より前は、月の満ち欠けを基準とする旧暦が使われていた。

月は、日ごとに形が変わる。つまり旧暦を使っている社会では、月の形を見ることで、人々は今日が何日であるかを察することができた。

また、新暦では一年は三六五日で十二ヶ月、一ヶ月は三十日または三十一日であり、二月だけが二十八日である（四年に一度、二月が二十九日となり、一年が三六六日となる）。旧暦では、閏月がない場合は一年は十二ヶ月、一ヶ月は二十九日または三十日である。旧暦と新暦は概ね一ヶ月ずれている。

『竹取物語』では、八月十五日に月の都の人々がかぐや姫を迎えに来ることになっている。旧暦の八月は秋である。また、十五日の月は概ね満月である。旧暦の八月十五日は、新暦では九月の中旬（年によって日付は異なる）にあたり、いわゆる「中秋の名月」の日として知られている。かぐや姫が月に戻るという劇的な出来事が起こる日として、いかにもふさわしいといえよう。

『竹取物語』を読む際は、これらのことを理解したうえで、情景を想像させたい。

②秋の月を詠んだ和歌

秋の月がとりわけ美しいものとして詠まれてきたことを、二首の和歌によって確かめたい。

久方の月の桂も秋はなほもみぢすればやてりまさるらむ

「久方の」は「月」にかかる枕詞である。「月の桂」は月に桂の

木があるという伝説をふまえている。「もみぢする」は紅葉する意である。この和歌では、月にあるという桂の木が秋になって紅葉している様子を想像し、月の輝きに紅葉の美しさが加わっているので、月がいつもより明るいのであろうか、と詠んでいる。

心こそあくがれにけれ秋の夜の夜深き月をひとり見しより

「心」は自分の心である。「あくがる」は離れてさまよう意であり、「夜深し」は深夜であるという意である。この和歌の大意は、秋の深夜に、月をひとりで見ていたら、心が我が身から離れてしまった、というものである。月があまりに美しく、知らず知らずのうちに心が引きつけられてゆく状態を、たくみに表現した和歌と言えよう。

③八月十五日の月見

『竹取物語』の「八月十五日」に関連して、月見の風習と月の呼び名について理解させたい。九月十三日の月を「豆名月」「栗名月」と呼ぶのも、八月十五日の月を「芋名月」と呼ぶのと同様に、月に枝豆や栗を供えることに由来している。

月が、単に美しいものとして愛でられるだけではなく、季節の収穫物を捧げる対象となっていることに気づかせたい。

④蕪村の句

山茶花の木の間見せけり後の月

この句には、「山茶花」と「後の月」の二つの季語が含まれている。「山茶花」はツバキ科の常緑樹で、花は新暦の十月から十二月に咲く。冬の季語である。「後の月」は陰暦の九月であるから、秋の季語である。つまりこの句は、季節が異なる二つの季語が詠み込まれた、季重なりの句である。

こうした場合、一句のなかで、どちらの季語に重きが置かれているかを見きわめる必要がある。

この句の場合は、「後の月」が句の中心にある。詠まれている景色は、後の月が明るいので、山茶花の木々の隙間が見えるというものである。かりに山茶花ではなく別の樹木を詠んだとしても、句としては成り立つかもしれない。しかし、庭木として鑑賞される山茶花が詠まれているからこそ、詠者が庭で後の月を見上げている様子が明瞭に想像できる句になっている。

⑤月待の行事

「月待」は、決まった月齢の夜に人々が集まり、月の出を拝む行事である。

この教材で紹介した江戸時代の「二十六夜待ち」は、陰暦の正月と七月の二十六日の夜に月の出を拝むもので、月の光の中に弥陀・観音・勢至の三尊が現れると言い伝えられていた。

ちなみに江戸時代には、決まった日の朝に日の出を拝む「日待」の行事もあった。現代でも、元旦に初日の出を拝む風習が残っている。

江戸時代の月待は、月の出を拝むという民間信仰と、人々が集まって共に飲食を楽しむという娯楽とが融合した行事である。ポイントは、月が出るまで待つことと、その待つ時間を楽しむことにある。

現代では、月の出を待つという行為そのものが、ほぼ忘れられてしまっているかもしれない。しかし、「月待」の行事や、単元の言語活動3で扱われる「立待月」「居待月」「臥待月」という月の呼び名は、月の出を待つということが、往事の人々においては

日常の習慣の一部であったことを思い出させてくれる。

鑑賞

日が沈んだ後、月の出ていない状態がいかに暗いかということは、街灯などの発達した現代ではなかなか実感しにくいものである。

「宵闇」ということばがある。夕方の暗さを意味する場合と、陰暦の十六日から二十日頃、月の出が遅く宵のあいだが暗いことを意味する場合とがある。後者の場合、月が出る前に外を歩くとしたら、足下を照らす明かりがないと心許ない。

このことを念頭に置いて、江戸時代の噺本『聞上手』（安永二年刊）にある「提灯」という小噺を鑑賞してみたい。本文は、武藤禎夫校注『安永期小咄本集』（岩波文庫、岩波書店、一六七年）、によった。

友、遠方より来たることあり。何かのはなしに日を暮らし、「もうお暇申します」と立ちかかれば、亭主、「これは〳〵お残り多い。それ、灯を見せませい。イヤほんに、宵闇じやから、提灯をあげ申せ」「イヤ、それには及びませぬ。サア、お入りなされませい」といふ内に、女房が提灯をとぼして持つて出で、「ひらに、持つておいでなされませ」と差しいだすを、亭主見て、「アヽ、それは大ぶん古い」「イエ〳〵、どのやふに古ふても、よふござります」「それでもあんまりじや」といへば、女房、そばから、「ナアニ、夜だから御堪忍あそばせ」。

ある家の亭主のところに、友人が来て、話をしているうちに日が暮れてしまった。友人が「もうおいとまします」と帰ろうとすると、亭主は「お残り多い」と名残を惜しみ、外は宵闇だからと、提灯を用意するよう女房に言い付ける。友人は「それには及びません」と辞退する（「お入りなされませい」というのは、亭主が玄関まで送りに出ているので、友人が亭主に家の中に入ってくださいと促しているのだろう）。そのうちに、女房が提灯に火を入れて持って来て、友人にどうぞと差し出す。それを見た亭主が、「その提灯はずいぶん古い」というので、友人は「いやいや、どんなに古くてもかまいません」といい、亭主は「それでもあんまりだ」という。すると女房が「夜だから、がまんしてください」と言った。

宵闇だから提灯を差し上げるという亭主の申し出を、友人はいったん辞退しているが、実際に提灯が差し出されると、断らずに受け取ろうとしている。月の光のない宵闇には、提灯の明かりがありがたいものだったことがよくわかる。古い提灯を差し上げるのは失礼だという亭主と、それでもかまわないという友人に対して、提灯が古かろうと暗くて見えないのだからがまんしてくれという女房の言い分がおもしろい。

参考

国立天文台のウェブサイトの「暦計算室」には、「今日のこよみ」があり、月の出と月の入りの時刻などがわかる。

https://eco.mtk.nao.ac.jp/koyomi/

これを参考にして、月の出の時刻を調べ、実際に月の出を待つ「月待」の体験をしてみてもよいだろう。

（佐藤　至子）